

総合人間科学 生命科学

1 構 成 員

	平成19年3月31日現在
教授	1人
助教授	0人
講師（うち病院籍）	0人（ 0人）
助手（うち病院籍）	0人（ 0人）
医員	0人
研修医	0人
特別研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	0人（ 0人）
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技術職員（教務職員を含む）	0人
その他（技術補佐員等）	1人
合 計	2人

2 教員の異動状況

堀内健太郎（教授）（H7. 4. 1～現職）

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成18年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	0編（ 0編）
そのインパクトファクターの合計	0
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	0編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0編（ 0編）
そのインパクトファクターの合計	0
(4) 著書数（うち邦文のもの）	0編（ 0編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0編（ 0編）
そのインパクトファクターの合計	0

4 特許等の出願状況

	平成18年度
特許取得数（出願中含む）	1件

1. 出願番号：特願2006-155129，発明の名称：ポルフィリン（Y）の多価金属化合物の新規製造方法

5 医学研究費取得状況

	平成18年度
(1) 文部科学省科学研究費	0件 (0万円)
(2) 厚生科学研究費	0件 (0万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0件 (0万円)
(4) 財団助成金	0件 (0万円)
(5) 受託研究または共同研究	0件 (0万円)
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	0件 (0万円)

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	0件
(3) 学会座長回数	0件	0件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	0件
(6) 一般演題発表数	0件	

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0件	0件

9 共同研究の実施状況

	平成18年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	0件
(3) 学内共同研究	2件

(3) 学内共同研究

金山尚裕（産婦人科学）光線力学的治療（PDT）用薬剤ZnCP-I等についての研究

平野 達（光量子医学研究センター）ZnCP-I等の光線力学的性質に関する研究

10 産学共同研究

	平成18年度
産学共同研究	0件

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 光線力学的治療 (PDT) 用薬剤ZnCP-I等についての研究

この課題での研究は本学の¹産婦人科学講座、²光量子医学研究センターとの共同研究にて行なっている。

本学産婦人科学教室、化学教室との共同でヒト胎児便中から単離したZnCP-Iあるいは、すでにヒトに対してPDT治療薬として使用されているフォトフリンの血清中濃度の、より効率の良い測定法を確立しつつある。

(森島賀子, 堀内健太郎, 村上浩雄¹, 小澤英親¹, 金山尚裕¹, 河野榮治², 平野達²) ¹浜松医科大学産婦人科学講座, ²浜松医科大学光量子医学研究センター

2. ZnCP-I等の光線力学的性質に関する研究

この課題での研究は本学の²光量子医学研究センター、¹産婦人科学講座との共同研究にて行なっている。

今回、ZnCP-Iあるいは、フォトフリンの、実験動物、培養細胞に対する光線力学的効果について、多面的に検討を加え、種々成果を得つつある。

(森島賀子, 堀内健太郎, 村上浩雄¹, 小澤英親¹, 金山尚裕¹, 河野榮治², 平野達²) ¹浜松医科大学産婦人科学講座, ²浜松医科大学光量子医学研究センター

13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

1. 我々がヒト胎児便から取り出したコプロポルフィリンI亜鉛 (ZnCP-I) について、平成16年度から17年度にかけて、きわめて安全でなおかつ有効なPDT薬剤になりうることを明らかにした (①出願番号:特願2005-008341, 発明の名称:光感受性化合物, ②出願番号:特願2006-015530, 発明の名称:光線力学的療法用キット, ③出願番号:PCT/JP2006/300328, 発明の名称:光感受性化合物)。今回、ZnCP-Iの新規大量合成法についての特許を申請し (出願番号:特願2006-155129, 発明の名称:ポルフィリン (Y) の多価金属化合物の新規製造方法), すでにヒトに対してPDT薬剤として用いられているフォトフリンを含めた、血清中濃度の新規測定法を開発しつつある。

14 研究の独創性、国際性、継続性、応用性

1. 現在我々の行なっている研究の主要テーマの一つは、我々が1991年に新規物質として発表したコプロポルフィリンI亜鉛について、継続して、種々性質を明らかにし、その応用を見出していく、という姿勢で行われているものである。したがって、きわめて独創的かつ継続的で応用性は高く、その成果は国際的にも評価されるものである。